

英国の近代ツーリズム (その2) — 英国海浜リゾート

平 林 美 都 子

Modern Tourism in England (2): Sea Resorts

HIRABAYASHI, Mitoko

英国の休暇

英国では産業革命以後、「労働」という概念に大きな変化が生まれた。それに伴い、労働者に対する規律が重要な課題となっていた。定時に始業・終業するという時間による労働者の支配は、労働時間以外の時間、すなわち生活や娯楽時間に対する規律も含んでいた。これは「生活の全体に合理的な規律を課すこと」が「優秀な労働力を創出することができる」と考えられたためである¹。こうした余暇の合理化のために、農村社会に伝統的に存在した娯楽や祝祭行事が減少され、『粗野な』労働者階級を組織化されたリクリエーションで教化する²考えが広まっていったのである³。一方、19世紀に入ると労働も合理化されて労働時間が減っていく。専門的職業を持つ者は1840年代から土曜日午後が休みとなり、1890年代にはほとんどの労働者の土曜日が半ドンとなった。さらに1871年には法定休日であるバンク・ホリディの法案が通り、イングランドとウェールズでは聖金曜日、クリスマスに加えて新たに4日の祝日が制定された³。

「労働」と「余暇」の制度化が進むなか、行楽地の選択も制度化されていく。中・上流階級が心身の健康を求めてこぞって温泉から海浜へと向かったことは別のところですでに論じた⁴。こうした流行が、自由な余暇を手に入れた一般の労働者へ伝播するのに時間はかからなかった。鉄道網の大幅な整備が大衆の行楽に拍車をかける要因であったことは言うまでもないだろう。

ジョン・アーリ (John Urry) が指摘するように、海浜リゾートとは「19世紀の産業化の特別な側面であり、娯楽は新興の組織化された大規模な産業労働者階級に基盤を置く社会の中で組織化され構造化されるという新しい様式の成長から発生した」ものだったのである⁵。本論では、19世紀の英国労働者がどのような余暇を求めて海浜へ向かうことになったのか、さらに、英国海浜リゾートが娯楽用にどのようにデザインされたのかを概観したい。

ランカシャー綿織物工場労働者の休暇

海浜リゾートが一般大衆相手のビジネスとして成立するためには、行楽客が日帰りではなく滞在客となることが必要だった。ランカシャーの綿織物工場労働者は近郊の海浜リゾート

発展の条件を英国でいち早く満たしていた⁶。ランカシャー綿織物労働者（成人男性）の賃金がとりわけ高かったわけではない。ジョン・ウォルトン（John Walton）によれば、女や子どもが働きやすかったことや彼らの労働賃金が比較的良いことから、家族単位として考えるとランカシャー労働者の収入は良かったようだ。19世紀になると貯金と相互保険の制度もうまく運用されていた。遊興のためにあるいはいざというときのための保険機能としても、彼らの儉約精神は十分に培われていたのである。

ランカシャー地域には休暇制度を導入しやすい風土もあった。ウォルトンが説明するように、雇用者にとり、慣習となっている祝日に工場全体を休業する方が夏の間絶えず欠勤されるよりも良かったし、契約期間の休日を遵守させるのにも有利だったのである⁷。「ウェイクス・ウィーク」という1週間単位の休暇を全国に先駆けて導入されることになったのもこの地域だった。ウェイク（ス）（Wake(s）とは、英国国教会において教区教会の守護聖人を祝う徹夜祭の風習である。宗教改革後、過激なピューリタン主義の影響でさまざまな娯楽が禁じられた折、カトリックの祝祭行事だけでなく、英国国教会のウェイクまでも禁止の対象となった。とくにカトリック勢力が残存していたイングランド北部ランカシャー地区では、祝祭が厳しく禁じられた。あまりの過激なピューリタンの行動を制するため、1618年、ジェイムズ1世が合法的娯楽を妨げることを禁じる布告を発し、ウェイクなど祝祭的娯楽を認めた経緯があった⁸。

19世紀にはウェイクの休暇中、ランカシャーの綿織物地域住民がそろって行楽に出かけ、町が空っぽになってしまうこともあったらしい⁹。それにしても休暇先がなぜ海浜なのであろうか。これはおそらく中産階級の海浜ブームの影響や交通の便の良さが理由なのであろうし、また海の空間が広大であるため、さまざまな階級の人々に開放されているからであろう¹⁰。労働者が規律ある生活を送るなかで、飲酒や血なまぐさいスポーツに興じる習慣から「道理をわきまえたリクリエーション」へと変わっていくのは自然の成り行きだった¹¹。そして職住が緊密な環境において「道端、日曜学校、パブ、スポーツクラブで計画された」海浜旅行となれば、有無をいわず全員参加が原則となるのも当然だろう¹²。19世紀後半、労働者が健康に良いとされる海で休暇を過ごすこと、しかも休暇の旅は共同体で集団となって楽しむことがきわめて一般的になっていったのである。

海浜リゾートの発展

英国にはゆるやかな丘陵から浜辺へ続く海浜が多い。上流階級のための海浜リゾートとして早い段階に発展した所として南海岸のブライトヘルムストーン（Brightelmstone. 19世紀にBrightonとなる）がある。しかしここが温泉地バースの人気を凌ぐのは19世紀半ばを過ぎてからである。ロンドン近郊ではマーゲイト（Margate）が庶民の海浜リゾートとして先陣を切った。18世紀の後半、ロンドンからの行楽客はテムズ川を小型帆船（後に蒸気船）でマーゲイトを訪れた。ブライトンもマーゲイトも海浜リゾートとして本格的に発展したのは鉄

道網の発達によるものであった。

ベンジャミン・ビール(Benjamin Beale)発明によるビール式水浴馬車(Bathing Machine)が1754年に初めて登場したのはマーゲイトだった。以後、水浴馬車は19世紀英国海浜の象徴的景観の一つとなる。海浜の人気の度合は水浴馬車の数によって推し量ることができたほどだった。さらに海浜に無くてはならないものといえばロバとイソギンチャクだった。当時の浜辺にはロバに乗るものもいれば、イソギンチャクを採集して楽しむものもいた。実は18世紀の終わりごろから19世紀半ばにかけ、海浜地ではイソギンチャクや貝や海藻などの熱狂的採集ブームがあったのである¹³。

遊歩栈橋や娯楽施設が造られるのにはまだ間がある1850年代、海浜リゾートにはすでにかなりの客が訪れていた。パンチ・アンド・ジュディの人形劇、ブラス・バンド演奏、演芸などで各地の海辺は賑わいを見せていた。当時イギリス旅行中のアメリカ人作家ホーソーン(Nathaniel Hawthorne 1804-64)は、サウスポートの浜辺がいかに騒然としていたかを次のように日記に記している。

「朝から夜まで手回しオルガン弾きが次々とやってきて窓の下でひっきりなしに弾き続けている。ファゴットを持ち猿を連れた男は客から小銭をもらおうと感謝して帽子をとる。歌手たちは歩き回りながらギター片手に歌う。ハイランドのバグパイプ奏者は調子づばずれの音を絞り出し、傍らでハイランドの娘がホーンパイプ踊りを踊っている。パンチとジュディの人形芝居もある。ようするに、イギリスに横行しているありとあらゆる放浪の類が集まっているのだ。」(1857年6月21日 日曜日)¹⁴

ホーソーンもブラス・バンドに言及しているが、これは各海浜リゾートの風物だった。ラムズゲイト(Ramsgate)訪問中のカーライル夫人(Jane Welsh Carlyle 1801-66)も「ブラス・バンドは朝食中ずっと演奏するし、日中にも演奏を繰り返している」とその騒音ぶりを夫に書き送っている¹⁵。リゾートでのブラス・バンド演奏は南東海浜でも見られたが、実際には北部の文化だった¹⁶。

海浜は、海そのものに加えて、砂浜のオープン・スペース、遊歩栈橋、海岸沿いの遊歩道などさまざまな娯楽の可能性を持っている。急増する行楽客のニーズに合うように、海浜は徐々に整備されていったのである。

遊歩栈橋建設ブーム

栈橋(pier)は、潮の干満に関わらず、船舶をつないで荷物の積み下ろしや人々の乗下船を容易に行うために造られた建造物である。栈橋がない時代には下船した後、岸まで水の中や泥濘を歩いて渡ったものである¹⁷。19世紀になると行楽客による突堤の散策が流行した。ジェーン・オースティン(Jane Austen 1775-1817)が1815年~16年に執筆した『説得』

(*Persuasion*)の中には、登場人物たちがイギリス南部の海岸ライム・リージス(Lyme Regis)の突堤を散歩する件がある。夏になると水浴装置で活気づくという湾の描写の後、「町の象徴である突堤、古い不思議な景観と新しく作られたもの」とライム・リージスの観光名所を紹介している¹⁸。この海浜にはアルフレッド・テニスン(Alfred Tennyson 1809-92)、トマス・ハーディ(Thomas Hardy 1840-1928)、ベアトリクス・ポター(Beatrix Potter 1866-1943)も滞在した。

こうして、乗下船のためだけでなく行楽客の散策用にも利用される遊歩栈橋(Pleasure pier)が登場することになった。行楽客に料金を課した最初の栈橋は、ワイト島のライド(the Isle of Wight, Ryde)である。1813年から1814年に建設された全長1250フィート(380メートル)の栈橋には、入り口に料金所、所々に屋根付きの待合所を設けたが、それ以外の娯楽的要素はまったくなかった。この栈橋の先端に小さな休息所ができたのは1842年になってからである。1823年に完成したブライトンのチェーン栈橋は乗下船用と行楽客の散策用という両目的のために造られたものだが、栈橋の立案者は散策する人からの収入を多く見込んでいた¹⁹。『説得』の中でヘンリエッタが海の空気はどんな薬より効き目があると力説したように、栈橋は潮の干満に左右されることなく海風を味わうことができた²⁰。加えて、海の上を歩くことが栈橋の醍醐味だったのは言うまでもないだろう。

鉄道網が発達する1840~50年代、海が大衆にとって手軽な娯楽地となるにつれ、遊歩栈橋も海浜リゾートの目玉として徐々に注目されるようになる。しかし遊歩栈橋の建設には障害がいくつかあった。栈橋の建設には国会で法案が通り、さらに市長や商工会議所など当該海浜地域の有力者による承認が必要だった。許可が下りても、海中への建設となるとさらに困難を極めた。栈橋が完成してからも波浪、暴風、火災、船舶の衝突などさまざまな原因による損傷の危険と隣り合わせていた。にもかかわらず、遊歩栈橋を建設・運営する会社が次々と誕生し、海浜リゾートそのものがビジネスとして考えられるようになったのは、有限責任を負う株式会社法(1856年)が成立した背景があったからだった²¹。1850年までは12基だった栈橋が、1900年には80まで数を増やし、なかには二つ以上の栈橋を持つ海浜もあった²²。

遊歩栈橋は言葉通り娯楽施設として造られた。しかし1860年代には、当時の有名な栈橋建築家ユージーニアス・バーチ(Eugenius Birch, 1818-84)ですら、娯楽性が十分備わった栈橋を建築することはなかった²³。バーチの転機となったのは1869年から着手されたヘイスティングズ(Hastings)の栈橋建設である。この栈橋は、設計段階から2000人収容可能な娯楽用の大パヴィリオン建設が計画されていた。栈橋入り口の二つの料金所と先端のパヴィリオンは、当時流行したオリエンタル様式を採用。栈橋オープンは初の夏のバンク・ホリディである1872年8月5日だった。栈橋オープン初年度は482,000人、2年目は584,000人も行楽客が訪れた²⁴。

遊歩栈橋にはパヴィリオン、コンサート・ホール、レストラン、そして後述するウィンター・ガーデンなどの遊興施設が整備するようになっていく。とはいえ、栈橋のパヴィリオン

建設ブームが一気に高まったというわけではなかった。先に述べたように、栈橋建造のリスクは大きいため、1870年代、80年代の建設は栈橋上や先端ではなく、安全な岸辺だった。海浜への行楽客が急増した1890年代になってようやく栈橋パヴィリオン建設に拍車がかかり、パヴィリオンを備えた23の栈橋が作られた。その勢いは世紀が変わっても続き、1900年代には20の栈橋パヴィリオンが新たに建設されたのである。

海浜リゾートのガラス製建築

19世紀は鉄とガラスの時代である。1851年に世界初の万国博覧会が開催されたロンドンのハイド・パークには、この時代を象徴するクリスタル・パレスが建造された。基本的構造として温室様式をとったクリスタル・パレスは、万博終了後、^{大型温室}Winter Gardenとしてシデナム・ヒルへ移転。1866年の火災で建物の一部が焼失したため、それを修復して、1871年、当時最大級の水族館が造られた。ガラス製の水族館やウィンター・ガーデンは以後、海浜リゾートの娯楽施設として取り入れられていくことになる。

中流階級の間で異国の植物栽培がブームになったのは、ウォーディアン・ケース (Wardian Case) というガラス製容器が登場したことがきっかけだった²⁵。リン・バーバー (Lynn Barber) が『博物館の黄金時代』(*The Heyday of Natural History, 1820-1870*) の中で指摘しているように、1850年代は水槽趣味と海辺の散策趣味という二つの流行が結びつき、楽しむ対象として海をとらえ始めた時期であった²⁶。個人の水槽趣味はほどなく水族館建設ブームにとって代わる。1870年代になると、海浜リゾート各地ではこぞって水族館、あるいはウィンター・ガーデンの建設が始まった。こうした建物は単に温室として使用されていただけではない。コンサート・ホールやダンス室、読書室などのいくつかの用途にも使用される、まさに娯楽教養の施設だったのである。

ブライトンの水族館建設は1869年に着工された²⁷。パーチは当初、高層の塔や小塔をいくつも含むデザインを考えていたが、海の景観に悪影響があるということでこの案は却下された。1872年に水族館が完成。薄暗い装飾的な内部は食事をしたり新聞を読んだり、あるいは音楽会用にも人気があった。24フィート(7,3メートル)の水槽はイルカを収容することもできた。以後水族館建設は、サウスポート(Southport 1874年)、ブラックプール(Blackpool 1875年)、ヤーマス(Yarmouth 1876年)、スカーバラ(Scarborough 1877年)、エディンバラ(Edinburgh 1878年)、トーキー(Torquay 1881年)などで立て続けに進み、しかも年を追うごとに大がかりになっていった。

しかし、娯楽と教育の二つの効果を目論んだ水族館は短命だった。本物の研究施設は別の所へ移り、娯楽専門となった水族館はスケートリンクや低俗な演芸館へ変身した。現在残っているのは、大きく変貌を遂げたブライトン水族館とグレート・ヤーマス・ウィンター・ガーデンズ²⁸だけである。19世紀を象徴するガラスの娯楽施設は1世紀足らずでほぼ消滅したのだ²⁹。

英国海浜町サウスポート

ジョン・アーリはランカシャー労働者階級の殺到によって、19世紀半ばのブラックプールの「社会的色調が急速に低落した」と指摘している³⁰。ブラックプールは産業労働者には人気があったが、ノース・ショアー(North Shore)を除くと「[町の中心部全体が]計画性の欠如した集落となってしまった」ということだ³¹。一方、リヴァープールの北に位置するサウスポートは大きな建物や遊歩道や公園を作り、中流階級の客を引きつけ、19世紀にはブラックプールよりも繁盛していた。現在は知名度も低くなっているが、このサウスポートの海浜リゾートとしての発展と衰退を、以下概観してみたい。

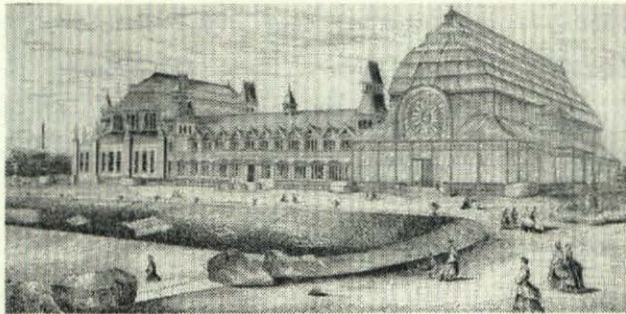
サウスポートが海浜町となったのは、1792年、一軒のホテルが建設されたときにはじまる。もともとこのあたりは砂丘だった。北部の村チャーチタウンに住んでいたウィリアム・サットン(William Sutton, 1752-1840)は、リーズ・アンド・リヴァープール運河(Leeds and Liverpool Canal)が砂浜近くまで開通したこと、リーズ方面からの客を見込んで海水浴客用ホテル建設を思いついた³²。現在のロード・ストリート(Lord Street)の南端である。当時、あたり一帯は砂浜で、人々はサットンのホテル建設を嘲笑っていた。しかし、彼が運河からホテルまでの輸送手段を整えたことから、集客という点でサウスポートはランカシャーの他の海浜地より有利となり、彼のホテルは繁盛した。これを見て、新たにホテル業を始める追随者もあらわれてきた。19世紀になるとサウスポートは非常に栄え、1820年には年間2万人の旅行客が訪れるほどになった。

サウスポートの遊歩栈橋(1859-60)を建設したのはジェイムズ・ブランリス(Sir James Brunlees, 1816-92)である。この地では1840年代から栈橋建設が話題に上りながら、実際の案件として取り上げられたのは1850年代になってからだった。港の栈橋が石で土台を造るのに対し、遊歩用の栈橋は杭を格子構造で繋ぎ合わせる方式で作られ、安上がりの反面、波に弱いという欠点もあった³³。栈橋の構造は杭、杭の上部を結合する梁、その上の板、そしてこれら三つを繋ぎとめる筋交いから出来ている。杭は当初木製だったが、傷みが早いいため1840年代から铸铁に変わる。当時の栈橋建築家バーチは、刃が付いた杭を地中に捻じ込む工法をとったが、ブランリスは杭の内部に管を通し、水を噴射させて地面を掘りながら杭を埋め込む独自の工法を考案した。

建設を始めてから1年後の1860年8月2日、栈橋はオープンした。これは最初の遊歩栈橋だとも呼ばれたが、装飾を排した左右対称のジョージアン様式の料金所は、娯楽的要素が十分ではなかった³⁴。しかし全長3600フィート(1098メートル)だった栈橋は、1868年には4380フィート(1335メートル)まで延長され、英国2番目に長い栈橋として注目を集めることになった³⁵。栈橋を延ばしたのは、砂浜が沖合まで広がっているため、干潮のときに船が接近できないからである。長い突堤の先端で吹きさらされる遊歩者や船客のために、まもなく待合室とレストランができた(1862年)。乗下船客の荷物運搬のためにはさらに、栈橋の中心に軌道が造られた。ポーターが手押し車を使いやすくするためだったが、遊歩者か

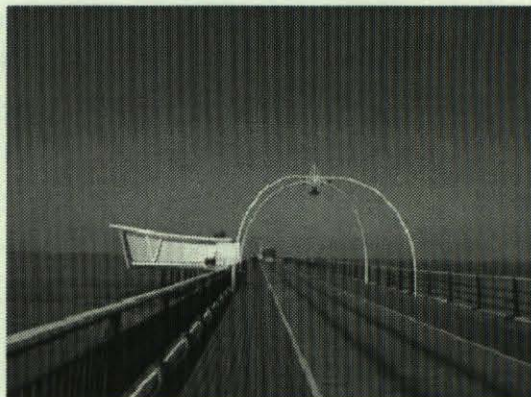
らは歩くスペースが限定されるという苦情が出た。そこで栈橋の幅を広げ、遊歩の部分と荷物運搬用の軌道部分を分けることにした。1865年、荷物運搬用に蒸気機関による電車が登場し、船客と荷物を栈橋の先端まで運ぶことができるようになった。

サウスポートのウィンター・ガーデンは1874年9月にオープン。大衆娯楽を目的としたウィンター・ガーデン建設の第一陣を切った。これは二つの建物が遊歩道で繋がっており、一方はコンサート・ホールを有するパヴィリオン、もう一方がガラスと鉄から造られたウィンター・ガーデンとなっていた。パヴィリオンは2500人を収容することができ、一方、温室の建物は全長180フィート（54メートル）、一番高い部分が80フィート（24メートル）だった。これは当時、イングランド最大級の温室だった。温室の1階には水族館とレストランもできた。ちなみにこの水族館の一番の人気は子どものワニで、購入する婦人もいたということだ³⁶。



(Southport Winter Garden, 1874. Public Domainより)

大きさを誇った温室ではあったが実際に採算はとれず、その後も不運続きだった。パヴィリオンの方は1897年に火災に遭った。設立会社は1898年に破産。ウィンター・ガーデンはその後、ダンス場やローラー・スケートリンクへ変貌した後、1933年に取り壊された。マンチェスターの建築家リチャード・フリーマン（Richard K. Freeman 1938/9-1904）は1902年、新しいパヴィリオンを建設した。これはサウスポートで最初の映画上映施設となったが、映画館へと変わることはなく、通常は海浜娯楽施設として使用された。このパヴィリオンは第二次世界大戦後、ヨーロッパからの影響でカジノへと変身するが、1969年に取り壊されてしまう。19世紀型海浜リゾートが持っていた「健康」や「教化」の要素は、20世紀後半には求められなくなっていったのである。



(2011年現在のサウスポート桟橋。
先端にはパヴィリオンと電車が見える)

海浜ブームの衰退

海浜リゾートは第二次世界大戦前、空前の賑わいを見せた。毎年行楽客が、ブラックプールには700万人、サウスエンドには550万人、ヘイスティングズには300万人、サウスポートとボーンマス(Bournemouth)にはそれぞれ200万人、イーストボーン(Eastbourne)には100万人以上、ラムズゲイト(Ramsgate)には100万人訪れた³⁷。この統計からJ・ピムロット(J. Pimlott)は1947年の自著において「当分の間、人気の上昇に歯止めがかかることはない」と海浜ブームに楽観的な予測をしていた³⁸。

しかしそもそもブームというものが永続することはない。確かに戦後しばらくの間、海浜リゾートは休暇キャンプ場として延命した。だが1950年代にピークを迎えたこれらの休暇キャンプ場は、1970年代80年代にはすでに時代遅れとなっていた。1987年、ヨーロッパのレジャー・グループ、センター・パークス(Center Parcs)がノッティンガム州シャーウッド(Sherwood)に開発した400エーカーのレジャー施設には、ドーム内に人口の海浜が造られた³⁹。「海浜リゾート」はもはや海辺である必要はなくなったのである。

ブーム衰退の最大の理由は海への魅力がなくなったことである。19世紀の海浜リゾートの発展は、産業化による都市の汚染のために、海浜での散策や水浴などの健康増進を求めたことが背景にあった。加えて、労働者階級を「組織化されたリクリエーションで教化」しようとする目論見もあった。しかし、やがて健康のために海ではなく太陽が求められようになり、地中海方面への旅へと休暇旅行も変化していった⁴⁰。粗野な労働者は文化的な市民へと成長したのである。鉄道の輸送力を背景とした19世紀の大衆の休暇が集団での旅だったのに対し、20世紀後半には個人を対象とするパッケージ海外旅行が主流となってきている。

海浜ブームが去った後、施設、とりわけ桟橋はどうなったのだろうか。すでに39の桟橋は焼失したり嵐に流されたりした。残った桟橋も、海浜行楽客が激減した現在、保存や修復のための財源確保が厳しい。海浜桟橋の保全と散策の楽しみを持続していくために、1979年、国立桟橋協会(National Piers Society)が設立された。桟橋をこよなく愛し、「桟橋はサウスエンドだ。サウスエンドは桟橋だ」と語った英国桂冠詩人サー・ジョン・ベッチマン

(Sir John Betjeman 1906-1984)がその初代名誉会長である⁴¹。ここには英国人の歴史的遺産保護への思いと実践力が見て取れる。棧橋の残存はこうした不断の実践にかかっているのである。

注

1. 川島昭夫「暦のなかの娯楽」32.
2. John Urry 19.
3. 1871年に制定された Bank Holidays はイングランド、ウェールズでは4日—Easter Monday、Whit Monday、8月第1月曜日、Boxing Day (アイルランドは St Stephen's Day)—である。Good Friday と Christmas は伝統的に休日なので含めていない。スコットランドではその2日を含めた5日—New Year's Day、Good Friday、5月第1月曜日、8月第1月曜日、Christmas)である。最初のバンク・ホリディは1872年のWhit Mondayからである。
4. 平林美都子「英国の近代ツーリズム（その1）——英国温泉地」参照。
5. Urry 17.
6. 当時のランカシャー綿織物工場労働者については、Walton を参照のこと (253)。
7. Walton 255.
8. 川島昭夫 7-9.
9. Walton 257.
10. 日本において戦後、経済的・時間的なゆとりが出てきた1960年代の異常な海水浴ブームも平準化を求める近代ツーリズムのはしりとして考えられるだろう。
11. Walton 257.
12. Walton 257.
13. J. A. R. Pimlott 134-35、Lynn Barber 111-124、Fred Gray 25-27 参照。
14. Nathaniel Hawthorne, *The English Notebooks*, 261.
15. 1861年8月6日。LETTERS AND MEMORIALS: JANE WELSH CARLYLE
<http://digital.library.upenn.edu/women/carlyle/jwclam/lam301.html#LM3-237> 18/Aug/2011
16. ヴィクトリア朝文化研究学会第9回大会（2009年11月4日、大東文化大学）のシンポジウム「サブカルチャーとブリティッシュ・アイデンティティー—ヴィクトリア朝再考」の発表者上宮真紀の「プラス・バンド運動再考」は、英国北部におけるプラス・バンド文化について有益だった。また Dave Russell, "Popular musical culture and popular politics in the Yorkshire textile districts, 1880-1914"も北部のプラス・バンド文化に関する示唆に富んだ論文である。
17. 映画『わが命つきるとも』(*A Man for All Seasons* 1966, 1994)において、テムズ川沿いのトマス・モアの屋敷に着いたヘンリー8世一行が下船後、川を歩いて渡っていくシーンが参考になる。
18. Jane Austen, *Persuasion*. The World's Classics. Oxford: OUP, 1984. 93.
19. Gray 202.
20. Austen 99-100.
21. Pearson, *The People*, 12.
22. Gray 204. 棧橋についての説明は Pearson, *The People's Palaces: The Story of the Seaside Pleasure Buildings of 1870-1914: Piers and Other Seaside Architecture*; Gray, *Designing the Seaside*:

- Architecture, Society and Nature* を参考にした。
23. 1860 年代に Birch が手掛けたのは Brighton West Pier (1863-6), Deal (1863-4), ウェールズ中西部の Aberystwyth(1864-5), Eastbourne(1866-72) などである。
 24. Hastings 栈橋建設の状況については <http://www.hastingschronicle.net/hastingsPier.html> を参考にした。この栈橋は 2010 年 10 月 5 日に火災でほぼ全焼した。
 25. Nathaniel Ward(1791-1868) が考案した植物運搬用容器。天井と側面がガラス張りになっている。1845 年にガラス税が撤廃されてから一斉風靡する。Lynn Barber, *The Heyday of Natural History, 1820-1870*, chap 8 参照。当時の温室/植物栽培ガラス容器の記号論的意味については、川崎寿彦『楽園のイングランド』「収縮する風景」を参照のこと。
 26. Barber 120.
 27. Brighton Aquarium の建築に関しては Pearson, *The People's Palaces* (54, 60.) を参考にした。
 28. Torquay で造られたものを Yarmouth が 1903 年に買い上げ 1904 年にオープンした。
 29. Pearson, *The People's Palaces*, 60. Pearson がその著書で残存しているという Tynemouth Aquarium & Winter Garden は 1996 年に焼失した。Crystal Palace Aquarium も 1890 年代からはサル園となって空の水槽にサルを飼っていたが、1936 年に焼失した。
 30. Urry 21.
 31. Urry 22.
 32. William Sutton については [http://en.wikipedia.org/wiki/William_Sutton_\(Southport\)](http://en.wikipedia.org/wiki/William_Sutton_(Southport))、また Southport については <http://en.wikipedia.org/wiki/Southport> を参考にした。当時の Southport の写真(本論では未使用)として、G. A. and A. G. Burgess, *Through the Letterbox*, Allan Brodie, Andrew Sargent and Gary Winter, *Seaside Holidays in the Past*, John Hannavy, *The English Seaside* が参考になる。
 33. 栈橋の建設方法については、Pearson, *Pier and Other Seaside Architecture* (6-10) を参照のこと。
 34. Southport pier の建設に歴史については <http://www.theheritagetrail.co.uk/piers/southport%20pier.htm> を参考にした。
 35. 1 番長い栈橋は、Southend-on-Sea のオーク材で造られた Southend Pier で、1848 年に延長して 7000 フィート (2100 メートル) だった。1889 年には鉄製に変わった。
 36. Barber 123. Barber は Frank Buckland の *Notes and Jottings from Animal Life* (1890, 359) から引用している。
 37. Pimlott 240.
 38. Pimlott 253.
 39. Urry 35. Center Parc については <http://www.centerparcs.co.uk> 参照。Nottingham 以外には Suffolk, Wiltshire, Cumbria に同じ経営母体のセンターがある。
 40. Urry 35. 海浜リゾートの衰退に関しては、Victor T. C. Middleton, "English Seaside Resorts — Tomorrow's Tourism or all our Yesterday's?" (May, 2001).
 41. <http://www.piers.org.uk/>

文献

Austen, Jane. *Persuasion*. The World Classics. Oxford: Oxford UP, 1984.

- Barber, Lynn. *The Heyday of Natural History, 1820-1870*. London: Jonathan Cape, 1980.
- Brodie, Allan, Andrew Sargent and Gary Winter. *Seaside Holidays in the Past*. London: English Heritage, 2005.
- Burgess, G. A and A. G. Burgess. *Through the Letterbox: A Picture Postcard History of Southport*. Southport: G. B. Studios, 1990.
- Gray, Fred. *Designing the Seaside: Architecture, Society and Nature*. London: Reaktion, 2006.
- Hannavy, John. *The English Seaside in Victorian and Edwardian Times*. Princes Risborough: Shire, 2003.
- Hawthorne, Nathaniel. *The English Notebooks 1856-1860*. Eds. Thomas Woodson and Bill Ellis. Ohio State UP, 1997.
- Middleton, Victor T. C. "English Seaside Resorts — Tomorrow's Tourism or all our Yesterday's?" (May, 2001).
<http://www.insights.org.uk/articleitem.aspx?title=English+Seaside+Resorts+-+Tomorrow%2527s+Tourism+or+all+our+Yesterday%2527s%3F#Matchingimage+and+reality> 2011年8月26日
- Pearson, Lynn F. *The People's Palaces: The Story of the Seaside Pleasure Buildings of 1870-1914*. Buckingham: Barracuda, 1991.
- *Piers and Other Seaside Architecture*. Prince Risborough: Shire, 2002.
- Pimlott, J.A.R. *The Englishman's Holiday: A Social History*. 1947, rpt. Hassocks, Sussex: The Harvester Press, 1976.
- Russell, Dave. "Popular musical culture and popular politics in the Yorkshire textile districts, 1880-1914". *Leisure in Britain 1780-1939*. Eds. John K. Walton and James Walvin. Manchester: Manchester UP, 1983. 99-116.
- Urry, John. *The tourist gaze: leisure and travel in contemporary societies*. London: Sage, 1990.
- Walton, John K. "The Demand for Working-Class Seaside Holidays in Victorian England". *Economic History Review*, 34(1981): 249-265.
- 川崎寿彦『楽園のイングランド—パラダイスのパラダイム』河出書房新社、1991.
- 川島昭夫「暦のなかの娯楽」『「非労働時間」の生活史—英国風ライフ・スタイルの誕生』川北稔編、リプロポート、1987、5-32.
- 平林美都子「英国の近代ツーリズム（その1）—英国温泉地」『愛知淑徳大学論集—グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第3号（2011）：51-61.
- <http://en.wikipedia.org/wiki/Southport> 2011年8月10日
- [http://en.wikipedia.org/wiki/William_Sutton_\(Southport\)](http://en.wikipedia.org/wiki/William_Sutton_(Southport)) 2011年8月10日
- <http://www.theheritagetrail.co.uk/piers/southport%20pier.htm> 2011年8月10日
- <http://www.hastingschronicle.net/hastingsPier.html> 2011年8月11日
- <http://digital.library.upenn.edu/women/carlyle/jwclam/lam301.html#LM3-237> 2011年8月18日
- <http://www.centerparcs.co.uk> 2011年8月11日
- <http://www.piers.org.uk/> 2011年8月18日
- <http://www.insights.org.uk/articleitem.aspx?title=English+Seaside+Resorts+-+Tomorrow%2527s+Tourism+or+all+our+Yesterday%2527s%3F#Matchingimage+and+reality> 2011年8月18日
- http://en.wikipedia.org/wiki/File:Southport_Winter_Gardens_1874.jpg 2011年9月7日